

信徒講座：宣教の使命に生きる⑤

Ⅶ. 現代における宣教の挑戦と課題

1. 「**宣教パラダイムの転換**」：20世紀末南アフリカの宣教師を務め、宣教学の指導的なスポークスマンとして活躍したボッシュは「Transforming Mission」を著した。彼は WEF と WCC の橋渡しで、その発言は双方から重要視された。彼の前提は「2千年に亘る教会の宣教観は、その時代々々の課題や挑戦によって変わってきているし、同時に宣教が時代を変える」というダイナミックなものである。宣教における思考と行動の枠組み(パラダイム)の変化過程は続いている。宣教とは現実を現状のまま受け入れる事を拒み、それを変容する事を目指す我々の信仰の一局面である。聖書の時代から始まって現代に致る変容を、克明に生き活きと突きつける。
2. **ポストモダン時代の特色と挑戦**：15世紀のルネッサンス、16世紀の宗教改革、17世紀の産業革命、18世紀の諸市民革命を経て生まれた「近代」の特色は、科学の発展に基づく進歩の思想、人間理性への信頼、社会の発展への希望、人間の創造力への信仰を共通の特色としていたが、その楽観主義は、戦争、環境破壊、精神的・道徳的な荒廃からくる深刻な疑問を生んだ。
 - ・**ポストモダニズムとは**、「過去数世紀に渡って西洋思想と社会生活を支え続けて来た諸原理や諸前提に懐疑的な態度を取る広範な文化運動」である。その特色は①科学の絶対性への懐疑：②「客観的な知識」への疑い：③著しい個人主義：④反権威主義、脱統制化、脱中心化：⑤環境破壊、精神的・道徳的荒廃の自覚と諦め：⑥著しい個人主義、反権威主義、脱統制化が導く相対主義；⑦エンターテインメント中心；⑧情報化による知識の共有と権威の水平化：⑨客観的原理よりも主観的感性の重視；⑩教会と世の隔絶、の諸点に纏められる
3. **ポストモダンに相応しい伝道方法**：伝道の内容と姿勢は時代によって変わらないが、その方法は大きく変えねばならぬ。それは柔軟性、相手への思いやりの姿勢である。エド・ステッツァーは、教会のあり方として①情報化社会の利用；②人々のニードと関心からのアプローチ；③交わりを通しての心の癒し；④福音の狭さ以外の躓きの除去；⑤人々のいる場所に近づく事を挙げる。私は更に、⑥受肉的な奉仕の在り方；⑦礼拝の視覚化；⑧真の交わりの形成；⑨明け広げの態度で群を導く事、⑨裾野を広げる伝道；⑩聖書を共に学ぶ；⑪スモールグループの活用；⑫魅力ある礼拝の場；⑬子供達・青年達への伝道と育成；⑭遠心的伝道への方向転換；⑮狭いマイ・チャーチイズムの克服；⑯国内伝道と国外宣教の二元論からの脱却、を挙げたい。
4. **ポストモダンにおける宣教の神学的理解**：「宣教の命令を、神の民にとって意味のあるもの、また動機づけを与えるものとして概念化する事」が必要。世界宣教の神学的理解の為に、① Globalization、②宣教活動の視野の拡大、③多くの社会問題、が求められている。求められている第一は宣教の定義の拡大である。「宣教とは、贖いの分野における神の支配的行動の一部であり…神のミッションであって、人のものではない。それは神の心から始められ、神の愛に基づき、神の御心によって定められたものである。…その成否は神の力による」。第二は神の国の伝達の強調である。「宣教の正しい理解は、神の国、つまりイエスが宣告し、その時代に示された良き音信、に焦点付けられる」。神の国こそイエスが宣告し、示された良き音信である、神の国の到来を伝える中に伝道、教会建設は含まれるが、それに限定されず、人生と社会の全ての局面において社会正義の確立を目指す。1974年のローザンヌ世界宣教国際会議では、伝道と社会・政治的関与はキリスト者の義務の両輪として認識された。③結論的に：福音の伝達を切先とし、教会形成に励み、その教会が社会において預言者的役割を果たす。